

女子短大生の早教育に対する態度

渡辺千歳

(お茶の水女子大学)

【目的】

近年、さまざまな分野において民間の幼児教室が開設され、幼児が早教育を受ける機会は増加している。このような社会環境にあつて、将来、子どもの親となってゆく学生達は早教育に対してどのような考えを持っているのだろうか。

今回は、教員養成系の女子短大生を対象として幼児向けの習い事や知育教室等についての態度調査を行った。

【方法】

被験者は栃木県にある女子短期大学、初等教育学科の2年生66名であった。この学生はほとんどが小学校教諭か幼稚園教諭を目指しており、子どもや教育への関心は高いと考えられる。

予備調査として、二つの大学の学生を対象に早教育に関する意見を自由記述式で求めた。この結果をもとに合計38項目から成る質問紙を作成した。

本調査では、これらの項目について賛成の程度を7段階で評定してもらった。加えて、早教育全般についての関心度を同じく7段階評定で、また、将来自分の子どもに与えたい早教育を8種類の中から選択する方法で回答してもらった。調査期間は1994年10月と11月、教育実習をはさんで同じ調査が2度実施された。

【結果と考察】

教育実習前の10月の評定結果に対し因子分析(主因子解、バリマックス回転)を行い、解釈可能性等を考慮して3因子まで抽出した。その結果の一部を表1に示す。

第1因子は、早教育の肯定的な側面を表しており、学業面での優位や、学歴社会での成功等に関するもので、「学校教育への適応に関する因子」と解釈される。第2因子は、逆に否定的側面を表しており、子どもらしさや社会性の発達の阻害を懸念するもので、「情操的発達への悪影響に関する因子」と考えられる。第3因子は早教育を与える親側の姿勢や関心に関するもので、「才能開発のための環境作りに関する因子」と考えられる。

次に、関心度の評定値とこれら三つの因子との重回帰分析を行ったところ、関心の高さには第3因子が肯定的に、第2因子が否定的に関与することが見いだされた。才能を見出すための環境を整えるべきだと考える者は、早教育全般に対して高い関心を持ち、情操的発達への悪影響を心配するものは早教育というものにあまり関心を示さない、という結果であった。

更に、将来自分の子どもに与えたい早教育の種類を三つの因子で判別分析したところ、「造形・絵画など美術教育」では第3因子が肯定的に関与しており、「外国語会話」では第1因子が肯定的に、「学業の先取り学習」では第1因子が肯定的に、第2因子が否定的にそれぞれ関与することが見いだされた。

なお、教育実習の前後を比較して分析を行ったが差は認められなかった。

表1 早教育に対する態度の因子負荷量(各因子上位5項目)

項目	因子1	因子2	因子3
16 小さいうちから知識を増やせるのでよい。	0.741		
6 学歴社会だから勉強ができる方がよい。	0.726		
38 親の言うことをよく聞く素直な子どもにするのに役立つ。	0.664		
11 うけることが世間で当たり前になればうけさせた方がよい。	0.639		
37 物事を考える習慣がつくのでよい。	0.603		
17 子どもらしさを失いそうだ。		0.764	
18 知識や技能の先取りは学校の授業を受ける意欲を失わせる。		0.689	
24 友達と遊ぶ時間を奪うので反対だ。		0.679	
26 感情表現が下手な人間になるのではないか。		0.678	
28 『早期英才教育』では、情操面の発達につながらない。		0.643	
33 いろいろなものに関心を持たせる事はよい。			0.705
5 早期から教育すれば能力が伸びるのか確かめてみたい。			0.589
13 将来、世の中に貢献できる人間になると思う。			0.513
22 子どもが学習したいと思う環境を与えることは大切である。			0.509
7 子どもに適性があるならばよい。			0.502

注) 因子負荷量の絶対値が0.5以下の項目は省略。